

第3回東井義雄賞

「いのちのことば」入賞作品が決定

【問合せ】
但東総合支所教育委員会分室

私に勇気と自信を持たせてくれた 父親のあの一言



式典では、東井義雄賞に輝いたことばが1編ずつスクリーンに写し出され、披露された。また、式典終了後には、兵庫県立大学環境人間学部長の清原正義さんの講演が行われ、東井さんが提唱した「村を育てる学力」の大切さをみんなで考え直した

2月12日、但東市民センターで、第3回東井義雄賞「いのちのことば」の入賞作品発表会が行われました。今回のテーマは、「私に勇気と自信を持たせてくれた父親のあの一言」。苦境に立ったとき、立ちあがる原動力となった父親の発した“ことば”958編が全国から集まりました。

厳正なる審査の結果、入選作品100編が決定し、最優秀賞の東井義雄賞には、大阪府豊中市の土岐奈津子さんをはじめ5人の方が選ばれました。

東井義雄賞「いのちのことば」とは？

東井義雄賞「いのちのことば」は、豊岡市但東町で生まれた東井さんの遺徳を顕彰し、その理念を後世に伝えるために平成15年度に創設された賞です。

東井義雄さんは、ひたすら「いのちの教育」の探究に尽くした日本を代表する教育者です。平成3年、79歳で亡くなるまで、常に子どもたちの側にいる教育を目指し、命の不思議、命のすばらしさ、そして、命の原点を説いてきました。また、東井さんは人々の心と生き方を支え続ける多くの「ことば」を残し、今でも人々に生きる勇気と希望を与えています。その東井さんの「ことば」と同じような、自分を支えてくれたかけがえのない「ことば」を多くの人も持っているのではないかと。旧但東町で

は、そうした「ことば」を全国から集め、その「ことば」をみんなで分かち合うことによって、手を携え共に生きる社会づくりにつながればという願いを込めて、本賞が企画されました。

第1回目は、「私をささえてくださったあの先生のあの一言」、第2回目は、「私を立ち上げてくれた母のあの一言」がテーマでした。毎回、全国からたくさんの方の応募があり、それぞれの「ことば」には、忘れられない、かけがえのない各自の思い出が凝縮されています。なお、過去2回の入選作品は、それぞれ冊子になっています。東井義雄記念館をはじめ、市内の各図書館でご覧いただけますので、ぜひ、ご一読ください。

東井義雄賞作品紹介(5編)

「父からのことば」は、原文のまま表記しています。

人は、かどがとれて丸くなるのではない。
大きな丸にかどが包み込まれるのだ。



土岐奈津子さん
(大阪府豊中市、35歳)

ことばを受けたときの状況

幼稚園教諭として勤め始めたころ、理想と現実のギャップに悩み苦しんでいたとき、仕事で忙しいはずの父が、ある日、私を食事に誘ってくれた。帰宅して毎晩泣いている私の様子を母から聞いて心配してくれたようだった。おいしい食事とたわいなし会話の後、コーヒーを飲みながらふと父が口にした言葉。私が「まだまだたくさん打たれて角をとらないと丸くなれないね」と言った言葉の返事だった。それまでの私は今は試練のときだと思っていた。新任の教師を甘やかさないよう、主任も先輩も厳しかった。一生懸命がんばってもだめだと言われ、何度もうり直してももう一度と言われた。けれども父の言葉を聞いて小さな世界で、縮こまって試練に耐えていた私の周りを覆っていた壁を取り払われた。そうか、私がつと成長して大きくなればいいんだ。すべてを包み込めるように大きな心の人間になれるように努力しようとするとき心に誓った。今でも何かあったときには必ず思い出す大切な言葉だ。

産め。産んでからでもどうにでもなる。



佐伯ヒサエさん
(新潟県新潟市、59歳)

ことばを受けたときの状況

私は、22歳のとき、隣町の旧家に嫁いだ。私の生家は中農である。だから、初めから婚家には馴染めぬものが多かった。ある日、私は数カ月ぶりに実家に帰り、慣れ親しんだ空気に接したせいか、旧家での辛さに泣き伏してしまった。その時、既に私のお腹には新しい生命が宿っていて、私は秘かに中絶して再発するしかない。と思っていた。ところが、母と共に妊娠を確かめて病院から帰ると、いつも無口な父がこう言い放った。「産め。産んでからでもどうにでもなる」と。

その後も婚家とはいろいろな軋轢あつれきがあったが、その都度、長女を頼りに生きていくよう父から諭され続けた。

その娘が今、獣医師として、一人暮らしの老人との関わりや、心身障害者と動物のふれあいなどを通して、社会奉仕の毎日を送っている。あの時の父の一言がなかったら、大切な社会の宝を葬ってしまうところであった。

社会人になるお前にこれだけは言うておく。
絶対に、ただ酒、ぬすみ酒、やけ酒だけは飲むな。



後藤 順じゅんさん
(岐阜県岐阜市、52歳)

ことばを受けたときの状況

今から30年前になる。明日から社会人として出発する晩だった。父が僕を呼びつけた。その時の言葉だった。父は祖父が酒におぼれた生活を見てきた。そのためか、「酒」に対して強い憎悪感を抱いていた。だが、つき合いでの酒を拒絶した訳ではない。人との潤滑油として、祝いの道具として、父は酒を楽しんだ。

ただ酒を振る舞う相手の口車に乗るな。ぬすみ酒をするような、さもしい人間にはなるな。やけ酒を呑んで自分をこまかすな。その三原則を守れば、社会人として最低限のことは守れるとの趣旨だった。僕はそれを教訓として生きてきた。あの言葉がなければ、僕はどこか曲がった道を歩いていたかも知れない。



第3回東井義雄賞「いのちのことば」

男がいったん選んだ職業を軽がるしく辞めるな。仕事に惚れる、任地に惚れる、女房に惚れる。この三惚れ主義で働け



石森茂夫さん
(石川県金沢市、70歳)

ことばを受けたときの状況
私は石川県警に36年間勤めた。それは巡査になつて5年目の春、人事異動で能登半島の突端の署へ転勤を命じられた。勤務地は島の駐在所とか。

結婚したばかりの妻は僻地を嫌がる。私も都落ちに落胆した。何やかやで嫌になり警察を辞めようと思ひ、田舎の父に相談したところ、言われたのが冒頭の言葉である。
幼いころ、悪戯などをして父に殴られたことがある。冒頭の言葉は子どもに打たれたよりも効いた。父の言葉に従ひ、新しい任地へ赴いたところ、そこは人情、環境などとてもよくて、妻はずっと居たいというくらいだった。
三惚れ主義は、あらゆる職業人に当てはまるのではないが。自分の職業に惚れ、与えられた任務にベストを尽くし、家庭を愛してゆけば、おのずとよい人生が開けるであらう。

『こそ』という言葉は決して自分にはつけてはいけません。いつも相手に使いなさい。それがこれから皆さんと仲よく暮らすコツだから。



今田淑子さん
(和歌山県海南市、66歳)

ことばを受けたときの状況

その昔、「オニ」というニックネームを生徒さんたちからいただいた中学教師の父。家庭でもなかなか厳しく、私たち子どもは「と名前を呼ばれると「ハイ！」と気合の入った返事をし、走らない程度に、一番早い速度で歩き、数秒以内に直立不動の姿勢で父の前に立たなければなりませんでした。

そんな父が、縁あって8人家族の長男の嫁として嫁ぐ私にしみじみと語ってくれたのがこの言葉でした。

あれから40年。家族の皆様感謝しながらも何だか恥ずかしく、一度も口に出して言ったことがありません。でも、心の中ではいつも「お義母様がやさしくいろんなことを教えてくださるからこそ、この家の嫁が務まるんです」
そして夫には、「あなたが家族皆と私の間に入って気を遣ってくれるからこそ、仲よく暮らせるのね」と感謝しています。

いのちのことば歴代入賞作品

(東井義雄賞のみ紹介、敬称略、住所・年齢は受賞当時)



私をささえてくださったあの先生のあの一言
(第1回、平成15年度)

木は木でいいの。石は石でいいの。良寛さんは良寛さんでいいの。あなたはあなたでいいの。

藤井秀一(兵庫県上郡町、65歳)

コスモスは、そうやって見たんじゃだめ。しゃがんで空と一緒に見なくちゃ……

本谷正輝(広島県東広島市、75歳)

空がどんなに曇っている日でも、上の方の高いところには、いつも青空が広がっているんですよ。

川島裕子(徳島県徳島市、15歳)

おまえの味方は必ずいる。

紺野美貴(神奈川県川崎市、30歳)

世界にはあなたがいなくても困らないし、あなたと何の関わりもない人がたくさんいるけど、あなたがいないと悲しい人だっているのよ。

宮野真理(鳥取県松江市、20歳)

東井義雄プロフィール



明治45年、但東町佐々木の小さな寺の長男とし生まれる。昭和7年、教師となり、以後、兵庫県下の小中学校を転任し、子どもを伸ばすことに情熱を傾ける。「村を育てる学力」の教育実践が高い評価を受け、昭和34年、広島大学よりペスタロッチ賞を受賞。昭和47年、小学校長を定年退職後、教育講演会活動で全国を回る。平成3年、79歳で死去。著書は多数で、「東井義雄著作集」「若い教師への手紙」など教育関係のほか詩集もある。

東井義雄の「いのちのことば」

太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない
太陽が昇るから夜が明けるのだ
川は岸のために流れているのではない
川のために岸ができていのである
亀は兎にはなれない、しかし、日本一の亀にはなれる
下農は雑草をつくり、中農は作物をつくり、上農は土をつくる
雨の日には、雨の日の過ごし方がある
自分は自分の主人公
世界でただひとりの自分を作っていく責任者
喜びの種をまこう、喜びの花を咲かせよう
ご縁のあるところにいっぱい

選考評

東井義雄記念館館長 宇治田透^{とうげん}さん

今回の応募の特徴は、10歳代の子どもの作品が多かったことです。悩み多き世代にとって、父親の一言は苦しみを取り除き、生きる勇氣を与えてくれるものだと感じました。しかし、そのことばは瞬時に理解できるときと、「親父はあの時こんな思いで言っていたのか」と5年、10年経って後で気がつく場合があります。子どもたちが、父親のことばを今後の人生に活かしてくれることを期待します。



一方、60歳代以上の出品者においては、若いときに父親から受けたことばを座右の銘にし、常に心に刻んでいる人が多くありました。苦しいときにそのことばを心の拠り所として生きてこられたことがひしひしと伝わってきました。

年々、いろいろな職業や世代の人からの応募が増え、大変うれしく思います。今後も、この賞が皆さんのお力添えによって受け継がれていくことを切に願います。

【選考委員】（6人、敬称略）

菅村 稔（岡山大学教授）、森村誠一（作家）、清原桂子（兵庫県理事）、奥田清喜（豊岡市助役）、宇治田透玄（東井義雄記念館館長）、川見正明（白もくれんの会顧問）

* 詳しくは、既に発行している「いのちのことば」入選作品集をご覧ください。

自分は、自分でええやんか。

田中未来 兵庫県姫路市、15歳

十年遅れたっていい。
死にもの狂いで勉強しなさい。
それで入れてくれる大学がなければ
その十年を人生の大学にすればいい。

静久記章 静岡県静岡市、43歳

直美、よう聞きよ。人間はな、陰でほめてもらって一人前や。はよう、人から陰でほめてもらえる人間になりや。
芝野直美 兵庫県三田市、45歳

泣くのは独りでもできるけど、笑うのは独りではできないよ。
鈴川達也 大阪府大阪市、32歳

人生は三年で良くも悪くもなるよ。三年間、努力してごらん。我慢してごらん。必ず人生は変わるよ。絶対に報われるよ。
山本 鍛 北海道旭川市、75歳



私を立ち上がらせてくれた
母のあの一言
（第2回、平成16年度）